

ワークショップC [死者とともに生きる]

ワークショップ「死者とともに生きる」 へのコメント

末木文美士

今回「死者とともに生きる」というワークショップのコメントを担当できますことを大変光栄に存じます。私は仏教、とりわけ日本の仏教思想を研究しており、哲学・思想的な方面が中心です。今回の3人の方はいずれも民俗学的な事例研究に基づいていますが、私は従来の哲学・思想的な研究が民俗的な実態とかけ離れていることに批判的であり、このような民俗学的な研究と積極的に関係を持つべきだと考えています。その点で、3人の発表はいずれも私にとって刺激的であり、示唆されるところが少なくありません。そこでまず、「死者とともに生きる」というテーマに対する私の基本的な考えを簡単に要約して示し、それから3氏の発表を考えてみることにしたいと思います。

2003年11月に本COEで主催した「死者と生者の共同性」というシンポジウムで、私は企画・司会などを担当しましたが、それより少し前から、「死者と生者の共同性」あるいは「死者とともに生きる」ということは、私にとって非常に大きなテーマとなっています。池上氏のご発表に、日本のあるおばあさんが、死者がどこにどうしているかわからないにもかかわらず、死者と関わりを持つことができるという話が紹介されていますが、これは非常に示唆的です。死者がどこにどうしているか、という観念は、宗教により、また民族により違っているでしょう。しかし、それでも生者は何らかの形で死者と関わりを持たずには生きていけません。死後の世界などないという唯物論の立場に立つ中国やかつてのソビエト連邦でも、毛沢東やレーニンの遺骸が神のように祀られ、崇拜対象となりました。このことは、たとえ唯物論の立場に立っても、死者との関係をなくすことはできないことを示しています。

このように、死者との関係は、生者が生きていくために不可欠なことであ

るにもかかわらず、近代の哲学者たちはその問題に目をつぶってきました。それは、彼らが死の問題を、死者との関係ではなく、自らの死後のあり方の問題と考えたためです。そうするとカントの先験的弁証論に典型的に示されるように、そもそも死後の世界があるのかどうかも哲学的には解答不可能であり、論ずることができなくなってしまいます。それゆえ、死の問題を考える際に、「死後」から「死者」へと問題を転換する必要があります。そうすれば、それは十分に哲学的な議論の枠に入ってきます。

このように私が考えはじめたときには知らなかったのですが、後になって田辺元（1885—1962）という日本の哲学者がすでにそのことを主張していることに気が付きました。田辺ははじめ日本の戦争を肯定し、京都大学教授として学生たちを戦場に送り出しましたが、戦争末期には自らの過ちに気づき、「懺悔道」を唱えて、それまでの自分の哲学を自己批判しました。その後、晩年に展開したのが自ら「死の哲学」とよぶ哲学です。田辺は死についての思索を深める中で、大きな影響を受けたハイデガーを批判するようになります。ハイデガーも「死」を重視し、「死への先駆的決意」ということを言いますが、どのように自らの「死」をあらかじめ引き受けようとしても、生きている限り決して自らの「死」に達することはできません。そこで田辺は発想を変え、「死者との実存共同」ということを主張するようになりました。その発想に至ったのは、ひとつには田辺の妻が亡くなり、田辺は孤独の中で、死者である妻とともにいることを実感したということがありました。

いま田辺の哲学についてこれ以上詳しく論ずることはしませんが、私は田辺のこの発想は、従来の哲学を覆す大きな発想転換だと思います。田辺の「死の哲学」については、従来ほとんど論じられてきませんでしたでしたが、今後、田辺は、哲学における「死者」の発見者として注目されなければならないでしょう。

さて、このように死者との共同性ということを考えるとき、従来の仏教に対する見方も大きく変えなければならなくなります。日本の仏教は、「葬式仏教」といわれるように、死者の葬送儀礼、死者の墓地の管理、そして死者に対する法要を大きな仕事としてきました。それは17世紀以後確立したもので、池上氏が指摘したように、今日でも多くの日本人の葬儀は仏教式で行なわれています。

ところが、近代の仏教研究者や仏教思想家たちは、その側面をずっと無視し続けてきました。「葬式仏教」は日本仏教の恥ずべき前近代性を表すもの

と考えられ、近代の仏教思想家たちはそれを少しでも隠して、仏教の本質は死者の儀礼ではなく、生きるための智慧を与えるところにあると主張し続けてきました。私自身、そのような近代的な仏教観の畏から自由になり、死者と関わる葬式仏教の重要性を認識するようになるのに、非常に長い時間を要しました。そして、現在では、民俗学者たちが明らかにしてきた死者との関わりを、哲学的にも重要な指摘として受け止めたいと考えています。今回の3人のご発表は、日本はもちろん、その他の文化圏においても、死者との関わりが宗教の重要な部分であることを明らかにしており、私にとって非常に有益で、心強いものでした。

* * *

以上、私の立場をご説明しました。以下、3人のご発表を要約して、議論の緒を作りたいと思います。

最初の池上良正氏の発表は、日本の民衆の宗教における「死者の身近さ」を取り上げています。池上氏によれば、日本の民衆の信仰においては、他の地域以上に死者が身近に感じられているということです。氏は、死者が身近に感じられるということは、死者が、単に懐かしく、親しみのある存在だけではなく、「時として、死者たちは深い未練や怨念を抱いて、みずから主体的に生者たちを悩ます存在でもある」と指摘しています。

死者がこの二面性をもつことは非常に重要です。しかし、池上氏が指摘するこのような死者の二面性は、フィーンズ氏が取り上げるキリスト教の場合や、ヴァサス氏が取り上げるユダヤ教の場合にも見られ、必ずしも日本独特とはいえず、より一般的に生者と死者の関係を示したものではないかと思われま

す。むしろ、氏の発表の中で注目されるのは、日本の民俗宗教では、必ずしも体系的な「他界（来世）観」や「靈魂観」を前提にせず、死後の観念が曖昧なままで、死者に働きかける実践の作法を洗練させるという柔構造を持っていた、という点でしょう。しかし、氏は、そのような日本の死者観の柔構造も今日次第に変化しつつあることを指摘しています。

フィーンズ氏はキリスト教（氏が言うのはカトリックのことだと思います）の洗礼における代父母と代子の関係が、現世のみならず来世にもわたることを論じています。代父母と代子は実の親子であることは認められず、血縁と異なる霊的な親族関係を形成するものだという事です。代父母は代子にとって天国への仲介者となり、逆に代子も代父母が天国に至るための仲介者に

なるというように、そこには「死者と生者のあいだの贈与、交換、相互性をめぐる「野生の思考」の力が観察される」といいます。それゆえ、代父母と代子の関係を持たずに死ぬことは危険を伴います。

フィヌ氏は、このような代父母と代子の関係に、キリスト教の特殊性を見ます。一つは、子供と大人の区別がないということです。もう一つは、代父母が実の親であってはならないことから知られるように、生者と死者との望ましい霊的な関係が、血縁関係の親しさと異なる距離をもたなければならぬということだといえます。

ヴァサス氏の発表は、ユダヤ教におけるディブークという現象についてです。ディブークというのは、死者の霊が生者の身体に入るという現象で、ショーレムによると、「生者に侵入して囚われた霊が、その魂に結びつき、精神病を引き起こしたり、生者の口でものを言ったり、別の人格を示したりする」ことだと言います。

ヴァサス氏は、ふたつの具体的な例を引きます。一つは、イタリアの人類学者リッカルド・ディ・セーニが翻訳した『1788年パドヴァのディブーク』で、生前に食べ物に関する戒律を破り、宗教的な祭典を冒し、多くの女と姦淫した2人のユダヤ人の男が、キリスト教徒の女の体に侵入した話です。もう一つは、アン＝スキという筆名で民俗学者が書いた戯曲『二つの世界のあいだ』で、1937年に映画化されたということです。ここでは花嫁の体に入った男——彼女にかなわぬ恋をして死んだ男ですが——が、最終的に彼女を「もうひとつの世界」に連れ去るといふもので、そこには、「魂もまた、神の意志によって他人の体に入る」というユダヤ人の宿命信仰が見られるといえます。ヴァサス氏は最後に、アン＝スキのようなディブークに題材をとった芸術は、日本の能にも近いものがあるのではないかと興味深い問題を提示しています。

以上、3氏のご発表を要約してみました。いずれの内容も興味深く、もっと知りたいところが少なくありません。しかし、せっかく違う文化についての興味深い事例がひとつのパネルで一緒に発表されるという得がたい機会ですので、個別の細かいことよりも、死者との関わりに普遍性と特殊性という両面があるのではないかとということ、共通の問題として提示してみたいと思います。

先に池上氏のご発表に関して触れましたが、死者との親しい関係は決して特殊な宗教や民族だけにあるものではなく、さまざまな宗教や民族に見られ

るものではないかと思えます。しかし、具体的な死者との関わりについては、それぞれの宗教や民族で異なっています。その共通性と相違を見極めていくことは重要なことだと思います。

池上氏は日本に特徴的なあり方を指摘しましたし、フィーヌ氏は代父母と代子の関係がキリスト教に固有であると主張しています。しかし、池上氏の言うような柔構造が本当に日本だけなのか、例えば、東アジアの他の地域では見られないのか、もう少し慎重な検討を要するのではないのでしょうか。また、フィーヌ氏はカトリックの場合を取り上げましたが、キリスト教でもプロテスタントや東方教会ではどうでしょうか。他方、ヴァサス氏は、ディブークと日本の能と近似しているのではないかという指摘をされましたが、むしろ死者の霊（死霊）が憑くというのは、日本の民間の信仰などに見られるものです。それに対してユダヤ人に特有と考えられるのはどのようなところにあるのでしょうか。

もうひとつ忘れてならないのは、民族的な習俗や宗教は歴史の中で変化しているものであり、不変なものではないということです。一方ではそのような死者との関わりがいつ頃形成されたか、ということが問題となると同時に、もう一方では池上氏が指摘するように、今日かつてのような死者との親しい関係が変化しつつあるのではないかと思えます。このことはフィーヌ氏やヴァサス氏の発表された事例に関してもいえるのでしょうか。

このように、死者との関わりの普遍性と特殊性、それは地域や宗教の違いという面と同時に時代による違いがありますが、それらの点に関してどのようにお考えかというところから、議論が開かれていけばと思います。

(すえき・ふみひこ 東京大学大学院人文社会系研究科教授)